

文化大革命初期の民間言説に見る「社会主義」認識について ——紅衛兵と上書者の言説の比較において——

(日本現代中国学会会員) 中津 俊樹

〔要旨〕

文革期に紅衛兵及び造反派の一部に出現した、毛沢東思想への懐疑とマルクス・レーニン主義に対する独自の思想的研鑽に関しては、(1)文革の長期化に伴う厭戦的雰囲気の出現、(2)文革の現実直面した彼等の失望感——に着目した分析が一般的であった。しかし本稿で指摘したように、この種の試みは文革の長期化に関わりなく、どの段階でもなされ得るものであった。本稿で検討対象とした一部の紅衛兵と上書者の場合、前者は文革の初期段階、後者は文革以前から既に毛沢東思想への懐疑を強め、独自の思想的営為を通じマルクス・レーニン主義の立場から毛沢東思想を批判するに至っていた。彼等はそれを通じ、「社会主義」に対する認識を深化させたのである。

I. はじめに

「プロレタリア文化大革命」(1966-76: 以下、文革) 期に毛沢東や中央文革小組と対立した紅衛兵・造反派組織のうち、いわゆる「極左派」紅衛兵・造反派組織の言説に関しては従来、第一に毛沢東らが文革当初に掲げた「コンミュン」理念等が文革の展開過程において撤回された事に対する彼等の失望感と、その反動としての文革理念に対する固執、第二に紅衛兵・造反派による思想的営為の結果、彼等の間に毛沢東思想を相対化する動きが出現した点に着目し、検討がなされてきた。例えば宋永毅はその結果として出現した各種の言説を、文革期の中国における「正統的」思想としての毛沢東思想に対する「異端思潮」と位置付けている。反面、宋の区分においては、毛沢東思想に批判的な要素を含む言説は一律に「異端思潮」として分類され、また「極左派」系のものに関しては根本的に「マルクス・レーニン主義」「毛沢東思想」の枠から出ないものとする見方が示されている⁽¹⁾。同様の議論は、徐友漁 [1997]

等の論者にも見られる⁽²⁾。これらの見方はこの二つの思想を同列のものとする前提の下で展開されているが、「マルクス・レーニン主義」と、「中国化」された「マルクス・レーニン主義」としての「毛沢東思想」の間には、前者における「客観規律性」の重視と後者における「主観能動性」の重視に象徴されるように理論上の差異が存在している事は、既に指摘されている通りである。この点に着目した場合、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の性格上の相違が、紅衛兵・造反派の「異端思潮」の形成過程にも何らかの影響を及ぼした可能性が考慮されるべきと思われるが、実際には従来の研究においてこの点が意識されているとは言いがたい。例えば、宋は紅衛兵が社会主義思想の原著の研鑽を通じて両者の相違を次第に認識するに至ったとの指摘は行っているものの、この種の認識が奪権闘争の過程における彼等の言説に及ぼした影響に関しては検討していない⁽³⁾。印紅標 [2006] は、「極左派」紅衛兵・造反派が文革期のいわゆる「地下読書運動」の過程で社会主義社会における特権階級の存在を指摘したミロヴァン・

ジラス（ユーゴスラビア元副大統領）の著作や、西欧型民主主義の影響を受け始めた事を指摘している⁽⁴⁾。印の研究は、彼等が毛沢東思想以外の書籍への研鑽を通じ、独自の思想的営為を試みている事実を明らかにしている点において、重要な示唆を提示している。反面、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の理論的相違が彼等の言説に及ぼした影響の有無に関しては、検討がなされているとは言い難い。

以上のように、従来の研究ではマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の理論的相違が、紅衛兵・造反派の言説に何らかの影響を及ぼした可能性に関して、十分に検討されていなかったのである。その要因としては、この問題に関する当事者の証言も含めて比較の対象となる資料が多くなく、彼等の思想的営為の実態を分析する事が困難であった事が指摘し得るであろう。

しかし、近年では文革発動40周年（2006）と前後する形で、かつての紅衛兵・造反派組織の指導者や成員による回想録が多く出版された⁽⁵⁾。加えて、近年では余習広〔2006〕が文革期に個人ないし少数の人物が党・政府指導者等に宛てた上書を収集し、活字化した。その内容は、上書というイメージから想像される権力者への個人的訴えといったレベルに留まらず、マルクス・レーニン主義の基礎的理論に基づき、文革、毛沢東思想さらにはマルクス・レーニン主義に対する毛沢東の認識を批判するものが多く見られる⁽⁶⁾。これらの資料は、紅衛兵・造反派に加え、民間言説における社会主義思想への認識を分析する事が可能になるであろう。特に、文革期には既に同一の存在とされていたマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を巡る彼等の認識、あるいは彼等が「社会主義」に求めた理想を知る上で、有効な資料といえる。

これらの点に着目するならば、「異端思潮」と紅衛兵の回想、上書に現れた社会主義に関する言説を分析する事により、従来画一的なイメージで

捉えられがちであった文革当時の民間での社会主義認識に関して、その多様性を明らかにする事が可能になると思われる。しかし、このような試みはまだなされていないようである。

そこで本稿では、マルクス・レーニン主義と、「中国化」されたマルクス・レーニン主義としての「毛沢東思想」を別個の存在として位置付けた上で、両者における相違が紅衛兵・造反派及び上書者の社会主義認識に及ぼした影響を検討する。それにより、「異端思潮」を含む文革期の民間言説と「マルクス・レーニン主義」「毛沢東思想」の影響に関して、新たな知見を提示する事を本稿の目的とする。なお、本稿では便宜上、前者を「マルクス・レーニン主義」、後者を「毛沢東思想」を呼ぶこととする。

ところで、「異端思潮」に象徴される毛沢東批判の出現に関しては従来、文革の長期化と、文革の現実に対する紅衛兵・造反派の失望感の拡大に着目して検討がなされる事が一般的であった⁽⁷⁾。換言すれば、文革以前との連続性は検討の対象とはされてこなかったのである。そこで本稿では、それ以前の段階における思想的潮流との連続性に着目し考察することとする。

続けて、本稿が検討対象とする資料の性格に関して把握しておきたい。

紅衛兵・造反派の言説は、『大字報』や『紅衛兵新聞』等により流布される事が一般的であった。それは、彼等の言説が不特定多数の読者に公開される事を意味する。当時の政治的・社会的状況を考慮すれば、この種の媒体において政治的危険や読者の警戒を招く表現を用いる事は著しく困難になったと思われる。一方、上書はその性格上、「私信」の形を取るのが一般的であり、『大字報』等と異なり不特定多数の対象への公表や受取人以外の開封を前提としない。無論、文革期の政治・社会状況を考慮した場合、上述の条件がそのまま機能する可能性は低かったであろう。しか

し、敢えて一般論としての私信の性格を利用した場合、差出人は自らの書簡が第3者の目に触れる可能性を形式上無視する一方、現実には検閲がなされる事を十分に想定した上で、敢えて自らの見解を第3者に伝える事が可能になったと考えられる。文書の形式を巡るこの種の相違は、それぞれの言説にいかなる特質を付与したのであろうか。この点も踏まえ、「異端思潮」と上書に現れた社会主義認識の性格を比較する事とする。

II. 文革以前の社会主義思想を巡る動向

1950年代以降から文革に至るまでの10年間は、反右派闘争（1957）、大躍進（1958）さらに中ソ両共産党の対立等の内外の情勢を背景として、「主観能動性」の強調に象徴される毛沢東独特のマルクス主義理解が国家建設に反映された時代と位置付ける事ができる。このような趨勢の中で、社会主義理論に関わる議論は次第に毛沢東の社会主義理解と相容れない理論に対する批判へと、その性格を変えていくのである。哲学分野において1950年代末から60年代初頭に展開された、「思维と存在の同一性」や「二を合わせて一とする（合二为一）」という楊献珍の議論に対する批判は、その端的な例であった。このうち、前者が批判対象とされた背景には、この問題に関する楊の議論が当時の中国における唯意志論、すなわち個人の意志や精神力を重視する観点への批判を含んでいた点にあったという⁽⁸⁾。唯意志論がその性格において毛沢東の「主観能動性」と同一の性格を有するものであるのに対し、楊の議論はマルクス・レーニン主義理論の基礎としての「客観規律性」を基盤としたものであったといえる。にも関わらず後者が批判対象とされた事実は、マルクス・レーニン主義に基づく議論であっても毛沢東の意に沿わない場合、その存在が許容されない状況が既に50年代末には存在していた事を示している。また、馮定（北京大学教授・哲学者）の共産主義的

人生観に関する著作も、「個人の作用の誇張」「指導者の神格化」を批判した記述が原因で批判対象とされた⁽⁹⁾。この記述もマルクス・レーニン主義に立脚したものであったが、中国共産党「成都会議」（1958）で毛沢東が「正しい個人崇拜」の必要性を主張した事実に着目した場合⁽¹⁰⁾、許容される可能性は極めて低かったといえる。

経済理論に関しても、マルクス主義経済学者・孫冶方が社会主義経済の発展の鍵として提起した、計画経済における価値規律の重視、经济管理面での利潤指標の位置付けの向上等の提言が「修正主義的観点」とされ、孫自身も「中国最大の修正主義者」として非難された⁽¹¹⁾。これは本来、生産関係と生産力の発展における客観規律性の重視という、マルクス主義経済学の標準的理解を前提になされた議論であったが、それが毛沢東等の意図と対立した時、この種の議論を展開する事は事実上のタブーとなったのである。

しかし、マルクス・レーニン主義理論に基づく議論が著しく困難になった事と、それに対する潜在的な反発の消滅は当然、同義ではあり得ない。この状況は逆に、毛の理論に対する哲学的観点からの疑問を水面下で拡大させる要因にすらなり得たであろう。特に、毛沢東独特のマルクス主義理解とその実践が政治・社会秩序全体に深刻な混乱を生じさせた場合、この種の疑問は一気に表面化する可能性を有していたといえる。以下の部分では、それが文革期に紅衛兵・造反派及び上書者の言説に及ぼした影響に関して検討する。

III. 文革期の民間言説にみる社会主義

1. 文革の理想と現実を巡って——紅衛兵における思想的営為

1966年5月16日、「中国共産党中央委員会通知」（「5・16通知」）の発表により、文革が正式に発動されると、毛沢東思想は「帝国主義が全面的な崩壊にむかい社会主義が全世界的な勝利にむかう

時代のマルクス・レーニン主義」¹⁰³として位置付けられるに至った。しかし、その一方、民間ではそれとは逆にマルクス・レーニン主義に対する研鑽を通じ、毛沢東思想を相対化する試みも出現し始めていた。その主要な要因は先述したとおりであるが、加えて、紅衛兵運動自体の長期化に伴う一種の厭戦的雰囲気¹⁰⁴の蔓延、さらに文革発動直後から1967年初めまで続いた紅衛兵の「経験交流」や、1968年末以降の農村地域への「上山下郷」の過程で紅衛兵が中国の現実の隔たりを目の当たりにした事は、彼等の間に文革及び毛沢東さらには毛沢東思想に対する失望感や疑念を生じさせた。それが、マルクス主義の原典及び関連文献の研鑽へと繋がっていくのである¹⁰⁵。当時、この試みは毛沢東思想に疑念を示すに等しい行為とされ、憚られる雰囲気が存在していた¹⁰⁶。にも関わらず、現実にはこの種の動きが着実に広がりつつあった。

ところで、このような動きは必ずしも文革の長期化のみに起因する必要はなく、彼等が上述の状況に直面した時点で出現し得るものだったはずである。紅衛兵組織の発祥地であった北京清華大学附属中学に在籍し、中国最初の紅衛兵組織の成員でもあった宋伯林の事例は、それを端的に示している。同校の紅衛兵組織は当初、「紅五類」（幹部・軍人・革命烈士・貧農・下層中農出身者）によって結成され、1966年夏からは毛沢東及び中央文革小組の支持を受けるに至った。しかし、同年秋に中央文革小組主導の「ブルジョワ反動路線」批判が本格化し、既存の党・政府幹部が打倒の対象とされるに及び、同校紅衛兵組織と中央文革小組との関係は急速に悪化始めた。宋自身は当初は「紅五類」出身者の立場から熱心に運動に参加していたものの、毛沢東が北京で初めて紅衛兵に接見して1ヶ月にも満たない同年9月頃の段階には何らかの理由で文革に対する情熱を失い、早くも文革との関わりを絶っている。その直後から、宋

はマルクス・レーニン主義の原著も含めた、読書による研鑽に没頭するに至るのである。その結果として宋が文革自体を相対化し得る心境に達した事は、彼の日記から次第に文革に関する記述が減り、それと反比例する形で各分野を網羅する読書メモが増え始めた事や、文革発動1年目の1967年5月16日と同年8月18日の日記がこの二つの日を特別な日と位置付けるところか、単なる日常生活のメモ程度に留まっている事実からも明らかである¹⁰⁷。同様の心境の変化は宋の友人であった駱小海も経験している。駱の場合、その背景には「ブルジョワ反動路線」批判の展開に伴う清華附属中学紅衛兵と中央文革小組の対立が関係していた。中央文革小組に不信感を募らせた駱は、読書や友人との対話を通じ文革の性格や社会主義に対する探究を深め始めたという。その結果として駱が到達した認識は「文革は皇権制度へ向かう政変であり、国家と人民に対する災難であり、文化を破壊する災難」である、というものであった¹⁰⁸。ここに、駱は現実への不信感とそれに起因する独自の思考の結果として、文革に否定的な意識を有するに至ったのである。一方、宋伯林の日記からは同様の意識の存在は読み取れないが、彼自身の行動に着目した場合、駱と同様の意識が文革後1ヶ月という極めて早い段階で形成されていた可能性は、十分に想定し得る。

この種の心境の変化は、宋や駱らと立場を異にする造反派紅衛兵組織の成員であった華新民も経験していた。華は上述の「ブルジョワ反動路線」批判の提起に、「十六条」等で提起された「パリ・コンミュン」型秩序実現の可能性を見出した。華にとってそれは、群衆が幹部の任免に関与する事により、幹部の制度的特権の解消を可能にする等、既存の社会主義制度全体の革新を具体化し得るものであった。しかし、実際には中央文革小組に対する批判が処罰の対象とされる現実¹⁰⁹に直面し、華は文革に対する懷疑を抱き始めた。その

後、華は駱小海や宋伯林と同様、マルクス・レーニン主義の原著を含めた社会主義思想に対する研鑽を深め始めた。その結果彼が導き出した結論は、毛沢東が文革を発動した意図は「特権階級への反対ではなく、群衆を利用した自身の政治的目的の達成」にあるというものであった⁹⁸。以上の事例は、異なる立場にあった紅衛兵が既に文革の初期段階において、何らかの理由で文革の理想と現実の相違に直面し失望感を強め、それを契機としてマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の研鑽に没頭し、最終的には前者に依拠し毛沢東思想に反対する立場に立った事実を示している。

紅衛兵・造反派におけるこの種の認識の形成にはマルクス・レーニン主義の原典と同時に、社会主義に関わるそれ以外の著作も影響を与えた。駱小海と華新民は、前出のミロヴァン・ジラスの著作『新しい階級』が彼等の思想的変化に多大な影響を及ぼした事実と言及している。彼等にとって、ジラスが言及した革命後の社会主義国家における新たな特権階級の出現という現象に象徴される制度的不平等の存在は現実そのものであった⁹⁹。彼等に対するジラスの著作の影響は、彼等における「社会主義」認識さらには文革の理想的イメージが、「平等」という観念と密接に結びついていた事の表れであった。ここに、「平等」の追求が駱小海や華新民等に象徴される一部の紅衛兵における「社会主義」のイメージとして出現するのである。それは論理的帰結として、その対極にあると考えられた毛沢東思想及びそれに基づく既存の政治・社会秩序の形成過程を、本質的に政治・社会秩序における「平等」を実現し得ず、かつ文革も毛の個人的権力強化を意図したものに過ぎないとする見方に結びつくのである。彼等はここに、「マルクス・レーニン主義の最高峰」としての「毛沢東思想」に対する相対化、ひいてはその克服を模索するに至るのである。

2. 「上書」の場合——文革以前からの不信感

一方、上書者の動機に共通するのは文革の現実への反発や失望感ではなく、反右派闘争や大躍進後の飢饉に直面した事に起因する、毛沢東個人あるいは毛沢東思想への疑念である。これは、彼等のこの種の認識が文革とは何ら関係なく生じていた事を意味する。

上書は、基本的に私信の形式をとって行われた。その出現時期は必ずしも特定の時期に集中しておらず、執筆者も様々な階層の人々に及んでいるため、上書という形式以外の共通性を見出す事は困難である。余習広が収集した上書を例にした場合、収録件数は30件、1966年7月から1976年4月までの10年間に及んでいる。余が収集し得なかった文書の存在も想定した場合、その出現時期がさらに遡るであろう事は、十分に考えられる。王申酉（文革当時、上海・華東師範大学学生）の事例は、それに該当するであろう¹⁰⁰。以下では、分析対象を文革期における上書のうち、社会主義認識に関わるものに限定することとする。この分類に該当するもののうち、余が収集した資料の中で時期的に最も早いものは1966年7月、遼寧省の中学教師・傅世安による毛沢東宛のものである。前出の王申酉は1960年代初期の段階で既にマルクス・レーニン主義の原著に対する研鑽を深め、既存の政治・社会秩序に対し「我々の国家には、なお“革命”の功臣と広範な民衆の間の不平等が存在している」（1963年）、「“三面紅旗”が出ると、三年の困難が六億人の頭上に降りかかった」（1965年）という、極めて深刻な認識を抱いていた。このうち前者は、レーニンが社会主義革命後における官僚主義の出現を防止する手段として提起した、「（一）選挙制だけでなく、随時の解任制、（二）労働者の賃金を超えない俸給、（三）「すべての人が統制と監督の職務を遂行し、すべての人がある期間「官僚」になり、したがってまた、だれも「官僚」になれない状態へ移行する」¹⁰¹とい

う理念が、1949年以降の政治・社会秩序の形成過程において実現されていないとするに等しいものであったといえる。王のこの種の認識が「大躍進」後に形成された事実は、例えば毛沢東が「共産主義の萌芽」と位置付けた人民公社に関しても、「都市も郷村も一律に公社と呼び（中略）、公社の中には「内務科」を設け、生死の届け出、婚姻、人口、民政を管理する」²⁴方法と、それによる官僚主義克服の試みを王が評価していなかったか、少なくともマルクス・レーニン主義的理念とは同一視していなかった可能性を、端的に示している。ここから、王がこの段階で、特権階層と非特権階層の存在に象徴される不平等の存在を毛沢東体制下における制度的弊害と位置付けるのみならず、その根源をマルクス・レーニン主義国家論における上述の理念と、1949年以降における毛沢東指導下での現実の政治・社会秩序の形成過程との不一致に見出していた事が窺える。実際、毛が大躍進期のある講話において「空想社会主義の中のいくつかの理想を、われわれは実行しなければならない」²⁵とも述べている事実に着目した場合、王が現実の政策に対する分析を通じ、毛の社会主義における非マルクス・レーニン主義的要素を見出した可能性は大いに想定し得る。その後、王は文革中の1968年に逮捕され、1976年11月に獄中で1949年以降の国家建設をマルクス・レーニン主義の観点から批判する上書を書いている²⁶。ここから、王が文革以前の段階から既に毛沢東指導下での国家建設をマルクス・レーニン主義から逸脱するものと理解し、批判的意識を強めていた事が明らかになる。

同様の観点から、文革以前に既に上書を行っていたのが、胡全林（文革当時、軍人）であった。彼も文革以前の段階で毛沢東に三通の上書を「提言」形式で送付していた。その後、胡は次第に毛の政策に疑念を強め、文革期にはマルクス・レーニン主義に立脚し毛沢東及び文革を批判する上書

を送付している²⁷。

前出の傅世安も、反右派闘争や大躍進後の大飢饉等の現実直面した事により、幼少時における毛沢東への「深い敬愛」が文革以前の段階で既に動揺し始めていた。この状況の中で傅は中国内外の書籍の研鑽を深めた²⁸。同様の傾向は、蕭瑞怡（文革当時、湖南省の高校生）の事例からも指摘し得る。蕭の場合、反右派闘争に関する記憶は影響を及ぼさなかったものの、大躍進後の大飢饉等が毛沢東思想及び既存の政治・社会秩序への疑念を生じさせる契機となった。それを背景として、彼は文革以前の段階でマルクス主義関連の書籍も含めた各種の書籍を渉猟し、研鑽を深めていた。その後、文革が発動され「世界は毛主席一人の世界になってしまった」が如き状況が出現するに及び、蕭はマルクス・レーニン主義の立場から毛沢東思想を批判する上書を執筆するのである²⁹。

これらを上書全体に共通する性格として一般化する事には当然、限界が存在するものの、上述の事例に限定した場合、以下の特徴を指摘し得る。まず、上書者の動機が文革以前の諸事象に対する反発や失望感に起因している点が挙げられる。多くの場合文革の発動が上書の直接的動機となった事はその発表時期からも明らかではあるが、上書者が文革以前からマルクス・レーニン主義的観点に立脚し、既存の政治・社会秩序を批判的に認識していた事実に着目すれば、より本質的な動機として、1949年以降の政治・社会秩序に対する疑念が存在していた事が明らかになる。紅衛兵におけるこの種の意識が、文革の理想と現実の間での失望感の所産であった点と対比した場合、上書者による批判はそれ以前の政治・社会秩序全体への疑念を起点としていた点において、より深刻なものであったといえる。

さらに、彼等の認識からは先述の楊献珍らのそれとの共通性を指摘し得る。例えば、「三面紅旗」に対する王申酉の批判や、毛沢東への個人崇拜を

批判した蕭瑞怡や胡全林の言説には、1960年代前半における楊等の言説と同様の傾向が見いだせるのである。蕭等の立場からすればこれは必然的な論理的帰結であったと思われるが、結果的に彼等は1960年代前半に毛沢東により批判された言説を継承し、更にマルクス・レーニン主義の立場から前者に対峙する事となったと言えよう。

IV. 現状認識と「社会主義」

1. 社会変革と「平等」の実現——紅衛兵・造反派の場合

紅衛兵・造反派と上書者におけるこの種の意識は、社会主義を巡る彼等の認識にいかなる形で反映されたのであろうか。

紅衛兵の場合、それは既存の政治・社会秩序における支配者——被支配者あるいは抑圧者——被抑圧者の間における制度的不平等の存在を前提とし、階級闘争的構図によりその克服を試みる動きとなって現れた。例えば、北京の造反派紅衛兵内部での「新思潮」とその流れを汲む「極左派」紅衛兵は当初、「党のファシスト化」に対する危機意識を抱き、既存の党・各級政府からの奪権と、「コンミュン」型秩序の実現による民衆への権力委譲という方法でこの問題を解決する可能性を模索していた²⁹。しかし、それが「上海一月奪権」後の「上海コンミュン」樹立の試みに対する毛沢東の介入により事実上挫折すると、彼等は既存の党・各級政府機構からの奪権と人民への「権力の再分配」の実現を掲げるのである。北京の「新思潮」の担い手となった造反派紅衛兵組織「四三派」は、資本主義社会での「少数の統治階級」による権力と財産の分配という形式が、社会主義革命後の社会においても少数の実権派、即ち党及び各級政府幹部への権力と財産の集中へと姿を変えて存在し続けているとした上で、それが権力と財産を有さない大多数の革命的民衆と実権派の間に「革」と「保」の矛盾を出現させているとの認識

を示した³⁰。「四三派」がその解決策として提示したのは、「保」と「革」との矛盾の爆発を通じた「権力の再分配」と、それによる政治・社会秩序における制度的平等の実現であった。宋永毅は「革」と「保」の対立、権力及び財産が新たに台頭した造反派をも腐敗させるとする「四三派」の認識に着目し、前者が毛沢東の「継続革命論」も含めた中国共産党の階級闘争理論と著しく異なっており、後者は共産主義体制自体が幹部を腐敗させると強調した点において、共産主義制度自体を否定するに等しいものであったとする³¹。しかし、「四三派」が自身を「社会的存在が社会的意識を決定すると考えるマルクス・レーニン主義者」³²と位置付け、階級闘争論的図式の援用により既存の政治・社会秩序の矛盾の解決を試みた時、彼等の行動は共産主義制度の否定としてではなく、ある種原理主義的ともいえるマルクス・レーニン主義的立場に立脚した、毛沢東思想への挑戦としての性格を帯びるに至ったといえよう。

広東省の「極左派」組織・「八五公社」も、文革以前の体制における「階級成分論」が「民衆の中に二十世紀の政治的身分制度を打ち立て」、「身分の低い人々に卑屈な感情を与え、侮辱を受けても敢えて反抗しない」状況を出現させたとした上で、「地主・富農・反革命・右派・悪質分子」の存在や「紅五類」出身者の優越を認めず、「階級成分の再区分」の必要性を提起した³³。平等という点に着目すれば、「八五公社」の観点からは、既存の政治・社会秩序における制度的不平等の根源への反発と制度的平等の確立に対する彼等の強い指向を見出す事が可能である。それは、毛沢東思想を指導理念とする既存の政治・社会秩序を本質的に不平等なものとし、それに替わる理念に基づきその再編を目指す見方へと結びつくのである。

一方、同様の観点を共有しつつも、既存の体制における制度的不平等の根源を単に制度的弊害と

してではなく、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の対比を通じ理解する事を模索した勢力も存在していた。例えば、「中華コンミュン（中華人民公社）」の樹立を強硬に主張し、中央文革小組に弾圧された湖南省の「極左派」組織「省無聯」はその代表的な存在である。その成員であった楊曦光によれば、彼は北京で共産党の特権を批判する「新思潮」に接した後、マルクス主義の原著に対する独自の研鑽と社会調査を通じ、文革激化の理由を独自に考察し始めた。その結果として楊が得たものは、「中国には既に新たな特権階級が形成されており、彼等は人民を「圧迫、搾取している」（純粋にマルクスの言葉）。中国の政治体制とマルクスが想定したパリ・コンミュン型民主主体制には少しも共通点が存在しない。従って、中国は新たな暴力革命により特権階級を転覆し、官員の民主的選挙を基礎とする民主政体を再建しなければならない」⁸³というものであった。この認識には、文革以前の政治・社会秩序に「官僚主義者階級と労働者階級」⁸⁴の対立という構図の出現を見出した毛沢東のそれとの共通性が見られる。その一方、楊においては、既存の政治・社会秩序自体がマルクス・レーニン主義に合致し得るものか否かという問題、換言すれば毛沢東体制そのものに対するある種の懐疑が出発点となっていた。それを起点として上述の認識に辿り着くに及び、楊は毛沢東思想に基づく政治・社会秩序の形成過程に本質的にマルクス・レーニン主義と相容れない性質を見出したといえる。

かかる認識に立脚し、「省無聯」は中華人民共和国建国以来の政治・社会秩序における矛盾の原因を、幹部と人民の関係が「指導者と被指導者」という関係から、支配者と被支配者という関係に、搾取者と被搾取者という関係にかわり、革命に平等に参加する関係ではなく、圧迫者と圧迫されるものの関係へと、変化していった」⁸⁵として、幹部を搾取者と見なす姿勢を明確に示した。既存の

体制下での幹部と民衆の関係を巡るこの認識は、前述の毛沢東による「官僚主義者階級」批判と共通するものであったが、楊等「省無聯」指導者が毛沢東体制を非マルクス・レーニン主義的体制と捉えていた点に着目すれば、彼等のこの言説はむしろ「今日支配的な日和見主義は、労働者党の黨員を、大衆から切り離された高給労働者の代表に育て上げる。つまり、資本主義のもとでかなり「うまい暮らし」をして、あじ豆のあつものとひきかえに自己の長子権を売りわたす、すなわち、ブルジョアジーに反対する人民の革命的指導者たる役割を放棄するような代表者に育て上げる」⁸⁶という、レーニンによる「日和見主義」批判と軌を一にするものであったと見る事が可能であろう。「省無聯」がこの観点に立っていたと仮定した場合、既存の政治・社会秩序における制度的不平等を巡る彼等の批判は、それを非マルクス・レーニン主義的性質の所産と位置付ける前提でなされたものといえよう。それは、既存の政治・社会秩序を「圧迫者」と「圧迫されるもの」の対立という階級闘争理論の図式に基づいて理解するのみならず、奪権後の権力機構としての革命委員会の成立によってもその図式を解決し得ないとの認識へと結びつくのである。加えて、文革当初に毛沢東や中央文革小組により提起された「コンミュン」型秩序の実現という理念が提唱者である毛沢東自身により禁じられ、替わって人民解放軍と旧幹部が事実上主導する革命委員会が奪権後の権力機構として出現した事実は、「省無聯」指導者がマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の相違を認識し、奪権後の権力機構の性質と先述のレーニンの言説を関連づけて解釈する事を可能にしたと思われる。この点から言えば、各地における革命委員会と直近の開催が予測されていた共産党第9回大会をそれぞれ「免官革命の産物」、「党の第九回代表大会の開催は、中国がどこへ向かうのか」という問題を解決できなさそうである」と位置付け、

「マルクス・レーニン主義者は革命委員会が人民を抑圧する本質を、必然的に、ためらう事無く暴露しなければならない」⁽⁴¹⁾とした彼等の批判が、「官僚制的に組み立てられ警察に守られた軍事的専制政治以外の何物でもないような国家」⁽⁴²⁾に対するマルクスの批判と同様の内容を帯びるのは、必然的であったといえる。

ここに、彼等の奪権は単に既存の秩序に対する変革としての性格のみならず、毛沢東思想的秩序に対するマルクス・レーニン主義の側からの変革としての意味を有するに至るのである。それに続くものは一般非特権的幹部の出現や彼等に対する民衆の側からの任免等、直接民主制的形態が保障され、また幹部の非特権化により民衆と幹部の間での支配—被支配の関係が解消された、「新しい形の政治機構」としての「中華人民公社（コンミュン）」⁽⁴³⁾の出現による、政治的・社会的「平等」の実現であった。同様の主張は、湖北省の「極左派」組織・「北、決、揚」にも影響を与えた。彼等は1949年以降の「二十年来、中国社会には新たな官僚ブルジョワジーが形成された」として、既存の社会における官僚層と一般庶民の間の制度的不平等の存在を指摘した。彼等によれば、それを克服する手段は、「革命党」の指導下における「政治革命」及び「社会革命」とそれに続く「北京人民公社」の実現であった⁽⁴⁴⁾。

直接民主制を巡る主張からは、彼等が「武装した群衆」による「暴力革命」という急進的手段により、既存の政治・社会秩序が内包する制度的弊害の解決を一挙に実現しようと試みたかの如き印象を受ける。特に「武装した群衆」による「暴力革命」という方法論は一見、マルクス・レーニン主義ではなくアナキズム的指向を彷彿とさせる。しかし、例えば「省無聯」がこの種の変革の手段として、官僚組織化した既存の党組織に替わる「毛沢東主義政党《中国共産党》」の設立を主張し、「北、決、揚」が同様に「革命党」という、

いずれも新たな前衛党の指導下での革命を主張した時、彼等はレーニン主義的前衛党理論に基づく革命という自らの方向性を確認したといえる。この点においては、彼等の言説は宋永毅が指摘したようにマルクス・レーニン主義の基礎的理論から一步も出るものではなかったが⁽⁴⁵⁾、彼等がマルクス・レーニン主義的変革を目指す場合、レーニン主義的前衛党理論に基づく戦術は不可避的な選択であったといえる。特に、彼等が毛沢東思想への疑念を抱き、マルクス・レーニン主義に正統性を見出した上でそれに基づく変革を意図していた場合、自らの論理的な正統性を担保する上でも、その起点としての「暴力革命」は「プロレタリアートの前衛——権力を掌握して、全人民を社会主義にみちびき、新しい秩序を指導し組織する能力をもち、またブルジョアジーぬきで、ブルジョアジーに反対して、自己の社会生活を建設する事業で、すべての勤労被搾取者の教師となり、指導者となり、首領となる能力をもつ前衛」⁽⁴⁶⁾——の指導という、レーニン主義的前衛党理論に依拠する必要があったのである⁽⁴⁷⁾。

また、「コンミュン」の直接民主制的システムの特質を民衆自身による行政・産業管理の具体化と位置付け、それを実現可能と考えた楊曦光等の記述には、「社会の全成員、あるいはすくなくともその圧倒的多数が、みずから国家を統治することをまなぶ」状態と「すべての人が社会的生産を自主的にまなび、そして実際にもこれを管理する」⁽⁴⁸⁾形式での住民自治の実現により「国家はますます急速に消滅」⁽⁴⁹⁾し始め、最終的に「すべての人が順番に統治するであろう。そして、だれも統治しない、ということにすみやかに慣れるであろう」⁽⁵⁰⁾とした、レーニンの認識との共通項が見られる。無論、これはレーニンのみならず大躍進期における前述の毛沢東の発言にも共通するものではあった⁽⁵¹⁾。反面、毛沢東が「人民公社は、政権と公社が一体化〔政社合一〕している。そこで

はまもなく徐々に政権は消えていくだろう」⁽⁴⁸⁾と発言する一方、「国家は階級闘争の道具であり、少数のものが国家を構成するしかないものであり、5億の人びと全部がどうして国家〔の機関員〕になり得よう（中略）。極端な民主主義、極端な平均（主義）は総じて通用しないのだ」⁽⁴⁹⁾という、コンミュンの理念に対する懐疑とも解釈し得る認識を持っていた事実に着目した場合、「コンミュン」を巡る毛とレーニン、あるいは毛と楊らの理解には「コンミュン」での直接民主制の是非や人民の役割を軸として、決定的な認識の相違が存在していた事が明らかになるであろう。この点においても、楊等「省無聯」指導者の「コンミュン」を巡る認識は毛沢東よりもレーニンのそれに近いものであったといえる。

また、「コンミュン」の実現過程における政治・社会秩序の変革に関しても、彼等は必ずしも急進的な手法による実現を主張しない。「省無聯」は文革以前からの「三大格差（都市と農村、頭脳労働と肉体労働、農業と工業間の格差）」の急速な解消に関しては何らの幻想も持たず、この状況が一定期間継続するとの見方を示した上で、その段階的解消を提唱する。これは、「公正と平等とを、共産主義の第一段階はまだあたえることができない。富の差別、しかも不公正な差別は残存するであろう」⁽⁵⁰⁾というレーニンの言説、あるいはマルクスのそれと一致するものであった。そして、それとは対照的に、「三大格差」の即時解消等に象徴される急進的変革の試みは「極左冒険主義」として否定されるのである。同様の「北、決、揚」も同様に、「北京人民公社」の実現に到る過程を急進的にではなく段階的に実現する事を主張する。彼等は既存の政治制度の解体からコンミュンの成立に至る流れを社会発展の必然性という文脈で捉え、それが「革命党」指導下の民衆による既存の党組織の解体とそれに続く革命委員会の成立、最終的には「北京人民公社」の成立に

より実現するとの見方を示す⁽⁵¹⁾。いわば、彼等も「省無聯」と同様、その急進的言辞とは反対に、実質においては前衛党の指導下での段階的革命という、マルクス・レーニン主義的革命理論に依拠した社会変革を主張したといえる。

以上の紅衛兵・造反派組織の言説からは、彼等の一部がマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を対立的存在と位置付けた上で、既存の政治・社会秩序における制度的不平等をマルクス・レーニン主義的階級闘争理論に依拠し解決する事を志向していた事実が明らかになる。その結果実現されるものは、既存の政治・社会秩序の所産としての制度的不平等に替わる「平等」であった。そして、それを具体化するのが、民衆による官僚の直接選挙、特権的官僚機構及び官僚の特権の廃止、民衆自治に象徴される政治的・社会的「平等」が実現すると想定された「コンミュン」であった。

ここに、「平等」の概念が紅衛兵・造反派における社会主義のイメージとして出現するのである。マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を巡る彼等の意識に着目した場合、それは取りも直さず、毛沢東思想及び毛沢東指導下での国家建設を「平等」を実現し得ず、かつ反マルクス・レーニン主義的とする前提の下、既存の政治・社会秩序をマルクス・レーニン主義に基づき変革するという、いわば毛沢東思想による革命へ向けられた再革命の意図の表明に他ならない。

しかし、それが彼等自身によって語られる事は無かった。むしろ彼等は、自らが目指す既存の政治・社会秩序の変革は反毛沢東的なものではなく、「社会的存在が社会的意識を決定すると考えるマルクス・レーニン主義者」が「毛主席が指導する文化革命に対する素朴な理解と熱望を抱き、かつ自覚的意識を高める」⁽⁵²⁾立場から展開するものであり、その目的は「毛沢東主義を旗印とする偉大な時代」に「毛主席が著名な五七指示の中で提起した新たな政治機構—中華コンミュン」

を、「暴力を用いて革命委員会のブルジョワ独裁と修正主義制度を転覆する」⁶³事により実現する事にあると強調するのである。これにより、先述の楊曦光の回想に象徴される彼等の本心、即ちマルクス・レーニン主義に立脚した反毛沢東思想的意識は巧みに隠されたといえる。彼等がマルクス・レーニン主義的立場を堅持する場合、自らを毛沢東思想の正統的擁護者と位置付ける事は必ずしも本意ではなかったと思われるが、当時の政治的・社会的状況さらには不特定多数の読者への公開という前提から勘案した場合、重大な政治的危険を招く危険性を回避した上で自らの変革理念を公表するためには、この種の論理展開は不可避だったであろう。そこに、大字報という形式をとるがゆえの限界が存在していたといえる。

2. 「客観規律性」と「主観能動性」の対立——上書者の場合

それに対し、上書者には自らの真意を隠す試みは見受けられない。ここには、先述した上書という形式の特徴が影響を及ぼしていると考えられる。彼等の言説の特質として指摘し得るのは、マルクス・レーニン主義的弁証法理論と「客観規律性」を、毛沢東思想の「唯心主義」的側面、「主観能動性」と対置させ批判する方法である。これは、マルクス・レーニン主義理論と毛沢東思想の理論的相違を対比させる方法により後者のマルクス主義からの逸脱を指摘し、更に辛辣かつ直截的言辞による毛沢東批判の展開を可能にした。

この種の批判は多くの場合、哲学的側面と既存の政治・社会秩序の形成過程の二点に着目してなされた。蕭瑞怡は「生産力は生産関係を決定し、生産関係は生産力に反作用する」という法則性を「マルクス主義の生産力と生産関係に関する弁証法」と位置付けた上で、それと対置される存在として「常に精神の作用を強調し、生産関係の作用を強調し、自ら美しき理想世界をつくり、客観世

界を彼の理想にあわせて回転させようとし、生産力を彼の考えた生産関係により回転させようとする」「唯心主義者」⁶⁴と、その種の人物による政治・社会秩序の形成を挙げた。ここでは、「唯心主義」的指導者は自己の意思を「客観規律性」に優先させる点において、「生産力を阻害し破壊する」存在として描かれている。この言説がマルクス・レーニン主義における「客観規律性」と毛沢東の「主観能動性」を対置させ、前者に依拠し後者を批判している事は明らかであった。一方、傅世安は蕭と同様、「客観規律性」重視の立場に加え、毛沢東思想の絶対化とそれに基づく政治・社会秩序の建設を批判している。傅は、弁証法の原則によれば「偉大な思想は、一つの時代においてのみ歴史的役割を果たすのであり、時代が前進する以上、自らの思想を固守してはならない」にも関わらず、毛沢東が「自らの思想を神聖化、絶対化、永久化」し、「マルクス主義の発展としての毛沢東思想」を「唯心主義と実用主義へ転化させた」結果、既存の政治・社会秩序の形成過程における「客観規律性」が失われたとの批判を行った。傅は「唯心主義と実用主義」を「問題をもって学び、積極的に学び積極的に用い、学んだら結合させ、急いで学び用いれば、たちどころに成果が現れる」事を強調し、「ある時、ある方面にある問題に結びつけるもの」とした上で、それは「人々に本質から弁証法的唯物主義を学ばせる方法ではないし、長期にわたり人に思想の根本から共産主義を受け入れさせるものでもない」と断じた。いわば、毛沢東思想の歴史的役割は是認しつつも、それが「唯心主義」的発想に基づき絶対化された結果、上記の弁証法の原則というマルクス・レーニン主義理論による毛沢東思想の相対化が事実上不可能となり、更には客観的条件を踏まえて毛沢東の政策に異議を唱える事も困難となった結果、毛沢東による独善的かつ恣意的国家運営が出現した、というのが傅の見解であったといえ

る。彼はそれを、毛沢東思想が「生まれた時は偉大な作用があったが、それが極端に向かった時には社会・歴史の発展を阻害」し、毛沢東が「独夫、暴君」として「独善と私利の擁護者」へと変化する状況が出現したとの論理によって表現した⁶⁹。また、胡全林はマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の根本的理論を比較し、後者を批判した。胡は林彪宛ての上書において、客観規律性と主観能動性を対置させる立場から「マルクス・レーニン主義は地理上の遠近によって革命の指導作用に影響するのか」との疑問を投げかけた上で、この種の論理が「全体的にマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の偉大な国際的意義を否定する事になる」として、林彪による毛沢東思想の絶対化を厳しく批判した。それがマルクス・レーニン主義の擁護を前提として展開されていた事は、胡が『資本論』におけるいくつかの革命的原理は時代遅れではないし、時代遅れにもならないし、決して打倒する事はできない、「マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの高低を機械的に比べ、天秤に掛ける事は、歴史唯物主義の観点ではない」⁶⁹と指摘した事からも明らかであった。それは同時に、毛沢東思想及び「主観能動性」という観念に対する胡の反発をも暗示していた。

以上の事例からは、上書者がマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の対置の結果として、後者におけるマルクス・レーニン主義からの逸脱を見出し、その“誤り”に対する論理的追究を試みた事が明らかになるであろう。彼等にとって毛沢東思想は、客観規律性を軽視する点においてマルクス・レーニン主義とは本質的に異なるものであった。そして、「主観能動性」の過度の強調が「群衆の願望を顧みず、領袖の思想を過度に強調する作用」⁶⁹を帯びるものへと姿を変えた時、「主観能動性」は社会の発展を阻害する点において反マルクス・レーニン主義論理とされるのである。これは、「個人の作用の誇張」や「指導者の神格化」

を批判した、前出の馮定の言説とほぼ同一のものであった。上書者は毛沢東思想に対する理論的批判の結果として、文革以前に批判された学説へと回帰するに至ったのである。当時の政治的状況下においては、かかる認識の公表は重大な結果を招く可能性を有していた。にも関わらず、上書者は紅衛兵・造反派が“毛沢東思想に対する擁護”というレトリックを用いたのとは反対に、自らの本心を偽ることなく公言したのである。それは、上書という形式によってこそ可能なものであったといえよう。

3. 「客観規律性」に基づく政治・社会秩序の形成——上書者の変革理念

では、上書者のこのような視点は、既存の政治・社会秩序の形成過程を巡る認識にいかん反映されたのであろうか。蕭瑞怡はこの問題に関して、①「生産関係は生産力の発展の性質の状況に適応し、生産力を促す事が出来る」という、生産力と生産関係に関するマルクス主義の弁証法、②マルクス主義における「生産関係が人の思想を決定する」との観点、③「人の本性」としての「自由」に対する渴望——の存在を前提とし、建国以来の農業政策を例として説明を試みている。蕭は「大躍進」期における農業政策の破綻とそれに続く経済調整政策の成功を対比し、その原因として「生産関係と生産力の適応、不適応の問題、すなわち土地制度は労働力を解放するのか、それとも労働力を束縛するのか」という問題を挙げた。また蕭は、建国後の農業集団化政策が「自由を愛する人間の本性に反する」「自由を束縛する桎梏」⁶⁹であると批判した上で、客観規律性の重視に基づく経済建設が行われていた時期には商品の流通が順調であったのに対し、農業合作化や大躍進の過程でそれが無視された結果、農業も含めた経済全体が破綻したと指摘する。この認識が単に人道主義的観点に基づくものではなく、所有制と個人の

関係を巡る標準的マルクス主義的観点を背景としたものであった事は、蕭が『反デューリング論』における、個人生産と個人所有制の変革時に強制的手段を使用することを批判する一文を引用している事実にも反映されている⁶⁹。蕭の一連の主張を端的に要約すれば、建国後の農業集団化政策及び大躍進に象徴される経済政策が「自由を愛する人間の本性に反する」ものであった結果、経済の破綻を招いたのみならず、農民及び労働者の労働意欲を低下させたとする一点に集約されるであろう。ここからは、「労働が労働者の本質に属していないこと、そのため彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感じずにかえって不幸と感じ、自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は頹廢化する（中略）。だから彼の労働は、自発的なものではなく強いられたものであり、強制労働である」⁶⁹という、資本主義社会における労働疎外を批判したマルクスの言説と同様の意識を読み取る事が可能であろう。また、蕭が「人の本性」としての「自由」に対する渴望という要素を強調した事実は、彼が建国以降の経済建設の過程にこの要素の低下ないしは欠如を見いだしていた事を示している。この点に注目した場合、蕭のこの種の認識は、建国以降の政治・社会秩序の形成過程全体をマルクス・レーニン主義における「客観規律性」に反し、かつマルクス・レーニン主義が批判した資本主義社会での労働疎外を克服し得ず、逆にそれと同様の状況を出現させた、とする認識の上に形成されていたと見る事ができるであろう。また、「主観能動性」を「唯心主義」とする蕭の見方には、毛沢東指導下での経済建設が「客観規律性」ではなく毛の恣意的発想を背景としてなされてきた、との批判的観点が読み取れる。ここに、毛による経済建設は「主観能動性」と「実用主義」を基盤とし、労働者及び農民の間には「人間がこれ

ら産業の諸力のために生産のよろこびや生産物の享受を断念するようになる」⁶⁹状況を出現させたものとして、否定される事となる。

傅世安は蕭と同様、マルクス・レーニン主義的な「客観規律性」を堅持する立場に立ちつつも、「主観能動性」に関しては個人と指導者のそれを区分して論じている。傅は個人の意識における「主観能動性」の存在を認めつつも、それが指導者個人の思想の強調へ発展する場合、政治・社会秩序の形成過程での「客観規律性」に対する阻害要因となるとの見方であった。傅はこの前提に立ち、「群衆の一人一人には自らの主観能動性がある」としつつも、「主観能動の作用を表現する指導思想は領袖に集中し、客観規律を反映する物質的願望は群衆において表現される」⁶⁹と指摘した。これは、民衆の物質的願望の実現という、ある種「主観能動性」に基づく行動が民衆の労働意欲を刺激する点において、政治・社会秩序及び経済秩序の均衡的發展と連動するのに対し、指導者の指導思想における「主観能動性」とそれに基づく政策は必ずしも指導者個人の物質的願望を反映しないため、現実離れした空論に陥ると批判するに等しいものであった。

ここに、「主観能動性」に基づく政治・社会秩序の形成は、指導者個人の恣意的発想を正当化するものとして否定され、それに替わる客観規律性の重視が上書者における課題として出現する。それは単に経済改革という対象のみに限定され得るものではなく、指導者個人の主観に基づく政治・社会秩序の建設という従来の在り方を転換し、「生産力を解放し」「自由を愛する人の本性」⁶⁹の活用を基礎とした客観規律性に基づく政治・社会秩序の再建という、マルクス・レーニン主義的方向性への方向修正を目指すものであったといえる。これにより、外来思想としてのマルクス・レーニン主義と「客観規律性」という原則を「中国化」されたマルクス・レーニン主義としての毛沢

東思想を対置させ、前者に基づく政治・社会及び経済秩序の再建を図る事が、上書者における問題意識として浮上するのである。さらに、これらの言説は生産力の解放、生産力の向上における物質的刺激の重視という点で、1960年代前半における楊献珍や孫治方ら「修正主義者」の見解と一致するものであった。上書者の立場からすれば、これはある種必然的なものであったともいえるが、彼等はマルクス・レーニン主義的観点に立って毛沢東批判を展開した結果、楊や孫の立場を継承する事となったといえよう。

上書者はマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の基本的理論を巡る対比を通じ、前者に理論的正統性を認めると同時に、後者が理論的に誤りを含んでいるとの見方に辿り着いた。その結果、彼等は毛沢東思想とそれを指導理論として推進された1949年以降の政治・社会秩序の形成過程を、マルクス・レーニン主義理論から逸脱した、理論的誤りを含むものと見なすに至ったのである。彼等がそれに替わるものとして見出したものは、外来思想としてのマルクス・レーニン主義の純粋な援用に基づく政治・社会秩序の再建、さらには毛沢東思想が内包する、マルクス・レーニン主義との理論的不一致の是正であったといえよう。

V. 結語

本稿で取り上げた紅衛兵・造反派及び上書者の言説には、以下の特徴が存在していた。

第一に、毛沢東思想に対する疑念に関しては、紅衛兵の場合は文革の現実に対する失望が契機となったが、それは文革の長期化とは必ずしも関わりが無く、文革のどの段階においても生じうるのであった事を明らかにした。一方、上書者の場合、この種の疑念は既に文革以前の段階で存在していた。いわば、文革はそれ以前から彼等が抱いていた毛沢東への疑念を証明する役割を果たしたといえる。第二に、「社会主義」という概念を巡

って、紅衛兵にはそれを「平等」と同一視する傾向が見られた。これは、「中国化」されたマルクス・レーニン主義としての毛沢東思想が「平等」を実現し得なかったとの見方へと結びついた。この認識に基づき、彼等は既存の政治・社会秩序に対する変革の方法論として、毛沢東思想ではなく外来思想としてのマルクス・レーニン主義さらに階級闘争理論に基づく変革への指向を強めたといえる。一方、上書者はマルクス・レーニン主義における客観規律性の重視と毛沢東思想における主観能動性を対比させた結果、毛沢東思想とそれに基づく既存の政治・社会秩序の形成過程に、マルクス・レーニン主義からの逸脱を見出した。上書者はこの見方に立脚し、外来思想としてのマルクス・レーニン主義及びその根本的概念としての客観規律性を軸とした、政治・社会秩序の再建を目指すのである。ここに、外来思想としてのマルクス・レーニン主義とその根本的概念としての客観規律性の重視、さらにそれに基づく政治・社会秩序の形成が上書者における「社会主義」と同一視されるのである。第三に、上書者の論理には、毛沢東思想における主観能動性を外来思想としてのマルクス・レーニン主義における客観規律性と対置させた点において、1960年代前半に「修正主義者」として批判された楊献珍や孫治方らの見解と一致していた。それにより、両者の間には論理的連続性が出現する事となったのである。ここに、文革期の民間思潮における社会主義認識が単に文革の現実に対する失望感のみならず、過去からの連続性を伴いながら形成された事実が明らかになると思われるのである。

ところで、紅衛兵や上書者におけるこの種の思想的営為は現実に対する失望という要素以外から考えた場合、いかなる性格を有するものとして位置付けられ得るのであろうか。「延安整風運動」(1942-45)以来進行したマルクス・レーニン主義の「中国化」の結果形成された、「マルクス・

レーニン主義、毛沢東思想」を一体的概念とするイメージ、とくに毛沢東思想を「マルクス・レーニン主義の最高峰」とする概念の拡大は、政府・共産党の公式イデオロギーとしての「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」という観念を共有する集団＝「人民」が創出される過程そのものであった。しかし、この種の思想的統合はその基盤が思想という不可視的なものであり、実際に成員がそれを許容しているか否かを具体的裏付けをもって確認する事は当然、不可能である。この点において、「中国化」されたマルクス・レーニン主義＝「毛沢東思想」の共有を軸とした「人民」の創出には、本質的な限界が存在していた。この状況下で一体的存在としての「人民」というイメージを持続させ得る手段は、発信者が強制力を背景としてその定着を図り、受け手の側が自身の内面とは無関係にそれを受容する姿勢を示す事であったであろう。この二つが一致した時、「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」というある種の政治的常識を形式的に共有する存在としての「人民」というイメージが形成されるのである。そして、それが「人民」全体が形式的に共有する概念として定着する時、「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」を一体のものとして捉えるイメージは、当時の政治的・社会的状況下における所産として「人民」が形式上共有する概念であり、同時に「常識」となったといえる。

これは同時に、この種の概念の妥当性が、大多数の人々による疑念の対象から外れた事をも意味すると考えられる。その要因としては、このような観念的問題が大多数の人々にとって必ずしも関心の対象とはなり得ないという点に加え、この種の概念が政治的・社会的常識となった段階で、それに疑念を差し挟む事は様々なりリスクを自ら招き、結果的に「人民」というカテゴリからの離脱を選択するに等しいものとしての性格を帯びるものとなった事を指摘し得る。いわば、「マルク

ス・レーニン主義、毛沢東思想」という定式化された概念に異を差し挟む事は、単に自らの政治的・思想的意思表示というレベルを超えた、ある種常識に抗する行為であったといえる。かかる事態を回避する方法は、思想的営為に関心を抱かないか、あるいは研鑽を深めつつもその成果を公表しない事だったであろう。いわば、この種の問題に関して敢えて発言を避ける事が、「人民」というカテゴリからの離脱ないし放逐という結果を招来しないための、無難な選択だったといえる。逆に言えば、敢えて思想的研鑽を深め、その成果を公表するという行為はそれ自体、政治的・社会的「常識」に反するものとしての性格を帯びる事とならざるを得ない。

この点に着目した場合、紅衛兵及び上書者の立場は、当時の政治的・社会的状況下における所産としての「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」という常識に敢えて疑念を差し挟む事によって、思想を軸とした国民統合の動きに正面から抗うものであったといえる。外来思想としてのマルクス・レーニン主義と「中国化」されたマルクス・レーニン主義としての毛沢東思想を対置させ、前者に正統性を見出した時、彼等は単に後者を批判し「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想」を一体とするイメージを拒否しただけでなく、当時の政治的・社会的常識を拒絶したといえる。換言すれば、彼等は思想的営為を通じて政治的・社会的に「非常識」な存在となる事を自ら選択したのである。それがマルクス・レーニン主義に依拠した毛沢東思想批判という形でなされた時、それは既存の政治・社会秩序及び当時の常識に対する、外来思想の立場からの批判という性格を有するに至ったといえよう。ここに、彼等の言説の特質が存在している。

最後に、今後の見通しについて若干、述べておきたい。第一に、本稿ではマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を巡る言説に着目し検討を試みた

が、紅衛兵・上書者におけるマルクス主義哲学を巡る理解、「プロレタリア独裁」を巡る問題、共産主義社会への移行過程を含めた社会発展に対する認識などについては資料的制約もあり、必ずしも十分に考察できなかった。第二に、社会主義を検討対象とする場合、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のみならず、アナキズムやトロツキズム等、様々な思想的傾向を有する個人ないし集団の存在をも念頭に置く必要があると思われる。従来の研究においては、紅衛兵の思想動向を巡ってはマルクス・レーニン主義、毛沢東思想との関連に着目した分析が一般的であり、それ以外の系統の思想からの影響に着目した研究はほぼなされていない。この点に着目した場合、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想以外からの思想的影響の可能性を念頭に置く事は、文革期の紅衛兵・上書者における社会主義認識に関して、新たな視点からの研究を行う事を可能とするであろう。第三に、紅衛兵・造反派及び上書者における思想的営為が社会主義思想のみならず近代民主主義思想を関心の対象としてなされていた可能性も、当然想定される必要があるであろう。

以上の問題に関しては現時点では資料的制約も存在しているが、これらを視野に含めた研究を行う事により、文革期の民間における思想的営為の実像を明らかにする事が可能になるのではないだろうか。

[注]

- (1) 宋永毅・孫大進著『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋（香港），1997年，p.269。
- (2) 徐友漁「異端思潮和紅衛兵的思想轉向」，劉青峰編『文化大革命：史実与研究』中文大学出版社（香港），1996年，p.268。
- (3) 宋永毅「從毛沢東的擁護者到他的反对派——中国文化大革命中年輕一代覺醒的心靈旅程的本質与毛沢東的集權思想」『当代中国研究』2005年第4期，URL:<http://www.chinayj.net/StubArticle.asp?issue=050409&total=91>（2006年7月1日確認）。
- (4) 印紅標「從「新思潮」到「新階級」——文革中青年的社会批判思潮」，宋永毅主編『文化大革命：歷史真相和集体記憶（上）』田園書屋（香港），2007年所収。
- (5) 魯礼安著・王紹光校『仰天長嘯：一個單監十一年的紅衛兵獄中顚天錄』中文大学出版社（香港），2005年は，湖北省の「極左派」紅衛兵組織・「北，決，揚」の元指導者であった魯礼安の回想録である。陳煥仁著『紅衛兵日記』中文大学出版社（香港），2006年，宋伯林著・余汝信編注『紅衛兵興衰錄：清華附中老紅衛兵手記』德宝出版（香港），2006年はそれぞれ，文革発動時に北京大学哲学科と清華大学附属中学に在籍し紅衛兵として活動した著者の日記である。労働者造反派組織指導者の回想録としては，陳益南著『青春無痕：一個造反派工人的十年文革』中文大学出版社（香港），2006年がある。
- (6) 余習広主編『位卑未敢忘憂国：文化大革命上書集』泰德時代出版（香港），2006年。
- (7) 例えば，宋永毅，前掲(3)論文。楊国斌「紅衛兵一代的認同轉變」，宋永毅主編，前掲(3)所収。駱小海「『紅衛兵興衰錄』序」，宋伯林，前掲書，pp.14-32。華新民「我所知道的北京“新思潮”」『華夏文摘』2004年，URL:<http://www.cnd.org/CR/ZK04/cr227.hz8.html>（2006年6月14日確認）。
- (8) 肖冬連等著『求索中国——文革前十年史』紅旗出版社（北京），1999年，下卷，pp.1094-1096。
- (9) 肖冬連，同上，p.1094。
- (10) 毛沢東「成都会議での講話」1958年3月，東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想 万歳（上）』三一書房，1974年，pp.221-222。

- (11) 肖冬連等, 前掲(8), p.1094。
- (12) 「中国共産党第八期中央委員会十一回総会の公報」, 1966年8月12日。邦訳は東方書店出版部編集『中国プロレタリア文化大革命資料集成』東方書店, 1971年, 第二巻所収。
- (13) 陳煥仁, 前掲書, p.328。
- (14) 宋永毅, 前掲(3), 印紅標, 前掲(3)。
- (15) 魏光奇, 丁東采「没有空白——文革時期的讀書生活」『人民網』“人民書城”HP, URL.<http://www.booker.com.cn/big5paper17/1/class00170004/hwz5428.htm> (2006年5月7日確認)。
- (16) 宋伯林, 前掲書, p.258, 307。
- (17) 駱小海, 前掲(7)論文。
- (18) 華新民, 前掲(7)論文。
- (19) 駱小海, 華新民, 前掲(7)論文。紅衛兵に対するミロヴァン・ジラスの影響に関しては, 宋永毅, 印紅標, 前掲(3)論文, 陳奎德「中国自由主義在文革中的萌芽」, 同上所収。
- (20) 王申酉(1946-1977)は文革發動時, 華東師範大学物理系学生。1968年に逮捕, 1977年に処刑。王申酉の経歴等に関しては, 王友琴著『文革受難者: 關於迫害, 監禁与殺戮的尋訪実録』開放出版社(香港), 2004年, p.408, 丁東「紀念王申酉」, 『觀察 (Observe china)』URL.<http://www.observechina.net/info/artshow.asp?ID=39215> (2007年3月10日確認), 劉曉波「向自由的先驅王申酉致敬」, 同上, URL.<http://www.observechina.net/magazine/artshow.asp?ID=25289> (2007年3月10日確認), 余杰「王申酉: 死於毛沢東暴政的思想者」, 同上, URL.<http://www.observechina.net/info/artshow.asp?ID=36141> (2007年3月10日確認), 金鳳「十年生死祭——紀念王申酉」, 同上, URL.<http://www.observechina.net/magazine/ArtShow.asp?ID=17179> (2007年7月27日確認)。
- (21) レーニン『国家と革命』初版1917年, 宇高基輔訳, 岩波文庫版, p.153。
- (22) 毛沢東「北戴河会議での講話」(1958年8月21日), ロデリック・マックファーカー等編, 徳田教之他訳『毛沢東の秘められた講話 (下)』岩波書店, 1992年, p.118。
- (23) 毛沢東, 同上, p.114。
- (24) 劉曉波, 丁東, 前掲(20)論文。
- (25) 余習広, 前掲書, pp.112-113。
- (26) 余習広「“拯救祖国”」, 余習広, 前掲書, pp.71-97。
- (27) 蕭瑞怡「熱血写春秋——回憶上書毛沢東」, 余習広, 前掲書, pp.22-34。
- (28) 華新民, 前掲(7)論文。
- (29) 「論新思潮——四三派宣言」, 宋永毅・孫大進, 前掲(1)所収。
- (30) 宋永毅・孫大進, 同上, p.245。
- (31) 「論新思潮——四三派宣言」。
- (32) 劉国凱著『広州紅旗派の興亡』博大出版社(香港), 2006年, pp.158-160。
- (33) 楊曦光著『牛鬼蛇神録: 文革囚禁中の精霊』牛津大学出版社(香港), 1994年, p.5。
- (34) 毛沢東「対陳正人關於社教蹲点情況報告の批語和批注」(1964年12月12日, 1965年1月15日), 『建国以来毛沢東文稿 第十一冊 (一九六四年一月—一九六五年十二月)』中央文献出版社(北京), 1996年, pp.265-266。
- (35) 省無聯一中紅造会鋼三一九兵団《奪軍権》一兵「中国向何处去?」, 原載広州《広印紅旗》1968年3月, 宋永毅・孫大進, 前掲書所収。
- (36) レーニン, 前掲書, p.42。
- (37) 前掲「中国向何处去?」。
- (38) マルクス『ゴータ綱領批判』初版1875年, 望月清司訳, 岩波文庫版, 1999年, pp.55-56。
- (39) 前掲「中国何処向去?」。
- (40) 「怎樣認識無産階級政治革命 (摘要)」, 原載『揚子江評論』1968年6月12日, 宋永毅・孫大進, 前掲書, 所収。
- (41) 宋永毅・孫大進, 前掲書, p.269。
- (42) レーニン, 前掲書, p.42。

- (43)筆者は以前、「第二の前衛党」の結成により既存の党組織との対決を掲げた「省無聯」の論理に関して、トロツキズムとの類似性を指摘した。拙稿「中国文化大革命期における紅衛兵の「極左思潮」について：革命委員会の成立を巡る動きを中心に」『アジア経済』Vol.46 No9アジア経済研究所，2005年9月。
- (44)レーニン，前掲書，pp.142－143。
- (45)同上，p.142。
- (46)同上，p.163。
- (47)毛沢東，前掲(2)。
- (48)毛沢東，同上。
- (49)毛沢東「省・市党委員会の書記会議における発言」（1957年1月），東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（上）』三一書房，1974年，p.114。
- (50)レーニン，前掲書，p.131。
- (51)前掲「中国向何处去？」，「怎樣認識無産階級政治革命（摘要）」。
- (52)前掲「論新思潮——四三派宣言」。
- (53)前掲「中国向何处去？」。
- (54)蕭瑞怡「上毛沢東万言書」，1968年5－6月，余習広，前掲書所収。
- (55)傅世安「致毛沢東同志的万言書」1966年7月15日，毛沢東宛添付文書「論“文化大革命”中的革命」1966年7月3日，余習広，同上所収。
- (56)胡全林「關於林彪“頂峰論”問題上毛沢東書」，1966年11月，余習広，同上所収。
- (57)前掲傅世安「論“文化大革命”中的革命」。
- (58)前掲蕭瑞怡「上毛沢東万言書」。
- (59)同上。
- (60)マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登，田中吉六訳，岩波文庫版，2000年，pp.91－92。
- (61)マルクス，同上，p.99。
- (62)前掲傅世安「論“文化大革命”中的革命」。
- (63)前掲蕭瑞怡「上毛沢東万言書」。